



茨城県地域臨床 教育センターだより

2016
Vol. 17

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121 平成28年2月1日発行(第17号)

茨城県地域臨床教育センター赴任の挨拶



教授

穂積 康夫

専門領域 ■ 乳腺・内分泌外科

平成27年10月1日付で赴任しました穂積康夫と申します。茨城県には過去に10ヶ月ほど某病院に勤務したことがあります。本格的に勤務するのは初めてです。

私は昭和57年に自治医科大学を卒業後、2年間を挟んで足掛け11年間出身県の福島で外科を中心とした地域医療を行いました。義務年限終了後の平成5年に、開院間もない自治医科大学附属大宮医療センター（現さいたま医療センター）の外科に戻り、外科の再研修とほぼ同時期から乳癌診療を開始しました。学位を取得、米国留学後の平成12年現県立中央病院名誉院長の永井秀雄先生（当時は自治医科大学消化器一般外科教授）のお誘いがあり、栃木の自治医科大学本院の消化器一般外科に移りました。これを機に、乳腺科、内分泌外科を専門に行っていくこととしました。乳腺外科ではなく乳腺科としたのは、当時も今も多くの施設では乳腺外科医が手術療法、薬物療法の両者を行っているからです。平成12年赴任当時、内分泌外科の症例はそれなりにあったのですが、乳癌の症例数は年間100例足らずでした。それまで手術も術後のフォローも様々な一般外科医が行っており方針もまちまちでした。そのような現状では乳癌患者数が増えるわけもなく、永井先生と相談し、乳腺チームを固定して統一した治療方針で行うこととしました。このことは今では当たり前のことですが、当時としては画期的なことです。このことは、その後乳腺（外）科が診療科として外科から独立することにも繋がりました。自治医

科大学本院には15年半在籍し、その間に乳癌症例は3倍になり、北関東では1-2の症例数になり、スタッフも最大の時で専任レジデントを含め10名にまでなりました。また赴任時に大塚（癌研）・築地（国立ガンセンター）に負けないような診療を行うと目標を立てましたが、臨床研究を含めた診療内容では劣らないような診療科に育てたと自負しております。

茨城県の乳癌診療の現状は、決して満足できるものではありません。診断領域で多くの専門家を輩出しているのにも関わらず、乳癌検診の受診率は全国第46位（ブービー賞で後は東京都だけ）です。また、北関東3県の乳癌診療の研究会での茨城県の施設からの治療の発表には？のものも少なくなく、筑波大学乳腺内分泌外科が孤軍奮闘の状態でした。こんな折に、永井先生から筑波大学の教員の身分で茨城県立中央病院へ赴任することのお誘いがありました。紆余曲折はありましたが、私も60歳を間近に控えて、最後のご奉公になればと思い赴任に至りました。赴任するに際し、永井名誉院長を始め、吉川病院長、筑波大学乳腺内分泌外科 原教授、坂東准教授には多大なご尽力を頂きましたことをこの場を借りて感謝をしたいと思います。

茨城県立中央病院へ赴任して、外来、手術室を始めとしたハード・ソフト両面で、前任地と変わらない診療内容が出来ることに、驚き嬉しく思いました。多くの先生方、コメディカルの方々の努力の賜物ではないでしょうか。今後、筑波大学乳腺甲状腺内分泌外科との協力の元、臨床試験を中心とした臨床研究を開始できるようにすると共に、県央地区の乳癌診療のコアになるようにしたいと存じます。もちろん、私個人だけでは何もできませんので、吉見先生を始めとした外科の皆様や小島先生を始めとした化学療法センターの皆様、放射線治療センターの玉木先生他多くの医局の方々、看護局、薬剤局他多くのコメディカル皆様のお力添えをお願い申し上げて、挨拶の言葉とさせていただきます。

第6回センター講演会報告



准教授
大越 靖

専門領域 ■ 血液内科
■ 造血器腫瘍

昨年12月10日、京都大学 iPS 細胞研究所准教授金子 新(しん)先生をお迎えして、第6回茨城県地域臨床教育センター講演会が行われました。

金子先生はiPS細胞からリンパ球をつくり出す研究の第一人者で、その技術を応用した新しいがん治療(現時点では開発段階)について講演されました。

がん細胞だけを根絶やしにして正常の細胞や組織は傷つけない、副作用の少ない治療法があれば…これはがんに苦しんでいる患者さんやご家族の切実な願いであるばかりでなく、がんを専門とする多くの医師や研究者が追い求める究極の治療法でもあります。がんの免疫細胞療法と呼ばれる治療も、このような考えを目指した治療法です。

からだの免疫力(医学的には単に免疫または免疫系といえます)とは、いろいろな細胞に加えて、抗体やサイトカインと呼ばれる特殊なたんぱく質や物質が作用し合い、病原体やがん細胞から生体を守る複雑巧妙なシステムです。はしかや風疹などは一度感染したり、ワクチンを接種したりすると、病原体の情報を体が記憶し、同じ種類の病原体が入ってきても速やかに攻撃し感染を防いでくれます(免疫記憶)。また、正常の細胞は攻撃せず、特定の病原体や、がん細胞など異常をもった細胞だけを見分けて攻撃する、「免疫の特異性」と言われるしくみも備わっています。この免疫系の中心になるのが、リン

パ球の一種であるTリンパ球です。

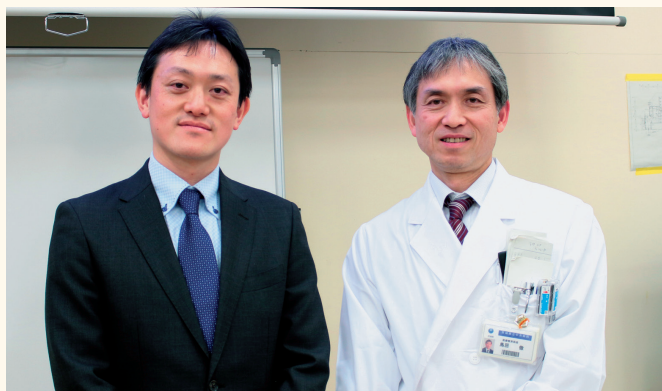
講演では、まず免疫系の基本的事項の説明に始まり、次に正常とがん細胞を見分けて攻撃するTリンパ球は患者体内でも作られてはいるが、多くは疲弊してしまっていて、十分にがん細胞を攻撃できないことが説明されました。従来の免疫細胞療法では、患者さんの体内からリンパ球を取り出し、試験管内で増やしそれを再び体内に戻すといった方法が試みられたのですが、多くは不十分に終わっていました。そこで金子先生は、がん細胞を見分けて攻撃することのできるTリンパ球を、一度iPS細胞にして、そこから疲弊していない新しいTリンパ球をつくり出す、「リンパ球の若返り」という独創的な方法を思いつかれたそうです。

先生のグループが開発された、「若返り」Tリンパ球を作る方法や、動物モデルを用いたこの細胞による治療の効果などが紹介されました。将来の臨床応用に向けてさらなる基礎研究が計画されているそうです。

金子先生はiPS細胞研究所の附属細胞調整施設長を兼任されており、講演の最後に、iPS細胞が臨床試験へと出庫される際の集合写真を、楽しいエピソードとともに紹介されました。そこにはノーベル賞受賞者の山中伸弥先生をはじめ、研究所内の多くのスタッフの皆さんが映っており、同研究所のスケールの大きさを感じさせる一枚でした。

現在のがん治療を大きく変えうる先進的なお話を、多くの写真や実験データとともに分かりやすくお示しいただき、あっという間の1時間でした。往年の研究者が若返りの刺激を受けたのか、質疑応答ではベテランを中心に多くの質問が寄せられ、さらに講演終了後には若手も交えて、金子先生との活発な議論が続きました。

ここにあらためて厚く御礼申し上げるとともに、金子先生のますますのご発展をお祈りいたします。



左：iPS細胞研究所 金子 新先生 右：島居 徹センター長



吉川裕之病院長



筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学附属病院 茨城県地域臨床教育センター

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121

ホームページ <http://www.hosp.tsukuba.ac.jp/chiiki/cyubyo/>



茨城県